

機関番号：12401
 研究種目：研究活動スタート支援
 研究期間： 2009 ～ 2010
 課題番号：21820004
 研究課題名（和文）コーパスを利用した言語の認知的・談話的基盤研究および
 定量的な言語分析手法の研究
 研究課題名（英文）The study of the corpus-based quantitative methodology and its
 application to the cognitive and discourse basis of language
 研究代表者
 大谷 直輝 (OTANI NAOKI)
 埼玉大学・英語教育開発センター・助教
 研究者番号：50549996

研究成果の概要（和文）：本研究では、理論と方法論の両面から言語構造を動機づける認知的・談話的な基盤についての考察を行った。具体的には、大規模な言語コーパスを参照して、実際の使用文脈の中から現れる、英語の不変化詞の談話機能や文法機能を考察した。また、方法論の面では、言語の身体性や反意語間に見られる非対称性に注目した質的方法論と、文法的・意味的・談話的な要素のコーディングに基づく量的な方法論を融合させ、言語を経験的に分析するための手順を示した。

研究成果の概要（英文）：This research studies the cognitive and discourse bases of linguistic structures both from a theoretical and methodological perspective. It, especially, examines the discourse and grammatical functions of English particles that emerges in usage with data from a large corpus. In the methodological point, this research attempts to merge a qualitative method, based on the comparison between antonyms, and a quantitative method, based on the coding of various factors, and then, provides a concrete method for various linguistic approaches.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	720,000	216,000	936,000
2010年度	550,000	165,000	715,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,270,000	381,000	1,651,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英語学

キーワード：認知言語学、コーパス言語学、談話・機能言語学

1. 研究開始当初の背景

近年、コンピューターの発達に伴い、電子化された言語データが大量に蓄積されており、これらのデータを用いて定量的な言語分析を行うコーパス言語学が発展している。このデータ面での急速な発展により、言語学で

は再編が進んでおり、従来は、学際的な研究が少なかった、機能的言語学の諸分野（認知言語学、談話機能言語学、会話分析、社会言語学など）が、共通のデータや方法論を使用することで統合してきている。しかし、データの充実に対して、方法論は進展が遅れている

る。多くの研究では、コーパス言語学の伝統的な分析手法である、語句の頻度や表層的な分布を用いた論証がなされており、言語の意味や談話的基盤を論じた定量的な研究は少ない。

このような状況の中、本研究の開始時点で、筆者は以下の二点の研究に従事していた。第一に、方法論の面では、文脈の統語的・意味的・談話的情報のコーディングに基づく、独自の言語コーパスを用いた定量的な意味分析手法を提唱し、使用の場で揺れ動く言語の動的な側面を分析してきた。第二に、提案した意味分析モデルを用いて、主に認知言語学と談話機能言語学の観点から言語の多義性、類義性、反義性などを分析してきた。

2. 研究の目的

本研究では、これまでに自身が確立した定量的意味分析モデルの精度を高め、このモデルを用いて、言語構造の認知的な基盤や、談話的な基盤を論じることを目的とする。同時に、反証可能な言語の意味分析モデルを構築するという包括的な目的を達成するために、以下の四つの具体的な研究の目的を設定した。

- (1) 様々なジャンルの言語データを構築する。
- (2) これまでに確立した定量的な意味分析モデルを精緻化して、様々な言語現象の分析に適用する。
- (3) 分析の理論的背景となる認知・機能的な言語観に関する最新の知見を学びながら、研究対象となる言語事例を発掘する。
- (4) (1)から(3)で行うデータ面、方法論面、現象面での改良に基づいて、言語構造を動機づける認知的・談話的基盤の研究を行う。

以上の四点は相互に関連がある。(1)はデータ面、(2)は方法面、(3)は記述面、(4)は理論面に関する目的である。この四点の具体的な目的を達成することで、最終的には、経験的で客観的な言語分析のモデルを構築する。

3. 研究の方法

本研究では、「2. 研究の目的」で挙げた四点の具体的な目的に対して、以下の四点の研究方法を採用した。

- (1) 言語コーパスの整備に関して
 - ① 日英語の言語コーパスの収集を続ける。また、それらを言語分析に適した形に加工する。
 - ② 日本語の話し言葉コーパスを構築する。
- (2) 定量的な意味の分析モデルの構築とそ

の応用

- ① これまでに用いてきた意味的・談話的な要素を吟味し、対象の特徴をより正確に表すことができる要素を発見することで、モデルの精度を向上させる。
 - ② Stefan Th. Gries と Dagmar Divjak が提唱した最新の定量的な分析方法 (Collostructional Analysis) を、日本語の分析に応用する。
- (3) 理論的背景の充実と言語事例の発掘
- ① 認知文法や談話機能言語学などの観点から、理論的な示唆をコーパス研究に与える。
 - ② 文法・意味・談話などがダイナミックに相互作用する言語現象を発掘する。
- (4) 言語構造の認知的・談話的基盤の研究
- ① 意味分析モデルを用いて、発話の場で揺れ動く言語の動的な側面を分析する。
 - ② 意味拡張の基盤としての身体に注目して、多義語の振舞いや反義語間の非対称性などを分析する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

言語構造の振舞いを認知的／談話的な観点から考察した。具体的には、理論面と方法面に関して以下の四点の研究を行った。

- ① 反意的な前置詞の対である *over* と *under* の比較を通して、前置詞 *under* に見られる条件法の帰結節を導く文法機能を分析した。最終的には、*over* と *under* には非対称的な意味拡張が見られ、*under* のみに文法機能が定着している点を示した。また、この *under* の文法機能が空間の意味から抽象的な意味を介して拡張している点を示すことで、拡張的な意味と文法機能の連続性を示した。[論文①、図書③]
- ② 前置詞の談話機能の振る舞いを、類義的な用法を比較することで定量的に考察した。具体的には以下の二つの研究を行った。第一に、従属節で使われる二種類の *aside* 構文 (後置詞型と現在分詞型) を比較することで、意味論レベルでは「～は別にして」という類義的な意味を持つこれらの構文が、談話レベルではまったく異なる機能を持つ点を示した。第二に、前置詞、後置詞、接続詞として使われる *notwithstanding* を例にして、この三つの用法の談話的な振

る舞いの違いを調べた。最終的にこの二つの研究では、意味論的には類似しているものの、談話レベルで異なる振る舞いを見せる構文について論じた。[論文④、発表①]

- ③ 2000年代後半から普及し始めた、コーパスを用いた基本的な語彙関係の分析手法である Behavioral Profiles アプローチを用いて、語彙の多義性と反義性の分析をおこなった。具体的には、*big/large/great* と *small/little/tiny* という反意語のグループの対に対して文法的・意味的・談話的な情報を付与することで、各語彙間の類似度や相違度を量的に示した。[論文③、図書②]
- ④ これまでに実践してきた定量的な意味分析手法を日本語に応用して、人称詞「こいつ」「そいつ」「あいつ」に見られる指示対象の非対称的な広がり を考察した。結果として、「こいつ」「そいつ」は人間以外にも具体物、抽象物、事態などを指示することができるのに対して、「あいつ」の指示対象はほとんどの場合人間に限られていることを示した。また、「こいつ」と「そいつ」では、「こいつ」に現場指示的な用法が多く、「そいつ」に文脈指示的な用法が多い点を示した。[論文②、発表⑤]

(2) 成果のインパクトと位置づけ

本研究の成果のインパクトや位置づけは次のようにまとめられる。

- ① 記述面：これまでの前置詞の多義性の研究ではほとんど論じられてこなかった前置詞が持つ文法機能や談話機能を考察対象としている。これによって、従来は意味論的な分野に留まっていた多義研究を語用論的な立場からも行える可能性を示した。
- ② 理論面：前置詞の文法機能や談話機能が拡張的な意味から派生することを示すことで、文法化が進んだ機能もプロトタイプ的な空間の意味から派生していることを示した。これにより、意味論の意味と語用論の意味という厳格な二分法ではなく、連続的な言語間に基づく分析の必要性を示した。
- ③ 方法面：文法的・意味的・談話的要素をコーディングするというコーパス分析の方法を示すことで、質的な考察を伴った、コーパス分析の手法を示した。また、このコーパスに基づく分析と、身体性に基づく認知的

な分析を組み合わせ、語彙間の様々な関係を分析するために用いた。

(3) 今後の展望

今後の展望として、本研究には以下のような広がり が考えられる。

- ① 機能主義の諸学派がコーパス言語学を中心に融合する際に方法論を供給する：言語コーパスの普及とともに、現在、用法基盤的な分析を行う機能主義の諸分野（語用論、認知言語学、社会言語学、談話分析、会話分析、歴史言語学など）の学際的な交流が始まりつつあるが、本研究では言語コーパスを用いた様々な研究手法を提案することで、実例に基づいて談話的な意味を扱う機能主義の諸分野の融合を方法論の面から促進する。
- ② 前置詞研究の拡大：1980年代から認知言語学や語彙意味論 (Lexical Semantics) の分野で盛んに論じられている前置詞の多義性の研究分野を拡張する。具体的には、文脈の中で生じる前置詞の文法機能や談話機能などのこれまではあまり論じられてこなかった現象に注目することで、意味論の範囲にとどまっていた従来の前置詞研究の範囲を語用論へも拡大させ、文法化や談話・機能言語学などの一般性の高い視点から多義性を論じることができるようになる。
- ③ 意味拡張の基盤としての身体性を論じる：前置詞の多義性や反意的な前置詞の対に見られる非対称的な意味拡張に注目することで、意味拡張を動機づける基盤としての身体性の役割を考えていく。これにより、従来はスローガンのように留まっていた「身体性」という概念を具体的に用いながら、意味の拡張や文法機能の定着を考察することが可能となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 大谷直輝 (印刷中) 「条件節を導く *under* について：文法化と身体性の観点から」『日本認知言語学会論文集』11 巻 (査読無)
- ② 小川典子、澤田淳、大谷直輝 (印刷中) 「日本語の人称詞の指示対象の拡張に関するコーパス分析」『関西言語学会プロシーディングス』30 巻 (査読有)
- ③ Gries, Stefan Th. and Naoki Otani

(2010) “Behavioral profiles: a corpus-based perspective on synonymy and antonymy,” ICAME Journal 34, 121-150. (査読有)

- ④ Otani, Naoki (2010) “The Discourse Function of the Aside Constructions: From a Cognitive and Discourse-functional Perspective,” In Fey Perrill, Vera Tobin and Mark Turner (eds.) Meaning, Form, and Body, 223-243. Stanford: CSLI Publications. (査読有)
- ⑤ 大谷直輝 (2009) 「認知主体の視点と価値付与の反転：英語不変化詞 up-down、in-out、on-off を例にして」『日本認知言語学会論文集』9巻 121-131.

[学会発表] (計6件)

- ① Otani, Naoki and Nathan Krug (2010) “The discourse functions of dependent clauses and phrases: A usage-based analysis of synonymous constructions,” CSDL/ESLP 2010, University of California at San Diego, September 16-19, 2010.
- ② 有光奈美・徐蓮・大谷直輝・澤田淳・阿部宏 (2010) 「対比・非対称性・意味の拡張メカニズム」日本認知言語学会(第11回)、立教大学、2010年9月11-12日
- ③ 小川典子・澤田淳・大谷直輝 (2010) 「日本語の人称詞の指示対象の拡張に関するコーパス分析」関西言語学会(35回)、京都外国語大学、2010年6月26-27日
- ④ Otani, Naoki (2010) “A Cognitive Study of the Aspectual Function of the Particles Up and Down,” ELSJ International Spring Forum 3, Aoyama Gakuin University, 24-25 April 2010.
- ⑤ 大谷直輝・小川典子・澤田淳 (2009) 「日本語の人称詞における指示対象の移行について－「こいつ」、「そいつ」、「あいつ」を例にして－」日本言語学会(139回)、神戸大学、2009年11月28-29日
- ⑥ Otani, Naoki and Stefan Th. Gries (2009) “Behavioral profiles: a corpus-based perspective on synonymy and antonymy,” ICAME 30, University of Lancaster, 28 May 2009.

[図書] (計4件)

- ① 山梨正明(監訳) 大谷直輝、他6名(訳) (印刷中)『認知文法序説』東京: 研究社
- ② 大谷直輝 (2011) 「BNCに基づく言語研究」辻幸夫(監) 中本敬子・李在鎬(編) 『認知言語学研究の方法』197-211 東京: ひつじ書房
- ③ 大谷直輝 (2010) 「前置詞」澤田治美・

高見健一(編)『ことばの意味と使用』104-114 東京: 鳳書房

- ④ 大谷直輝 (2009) 「不変化詞の主観的意味について: 有界性と価値付与の観点から」山梨正明、他3名(編)『認知言語学論考』8: 191-226 東京: ひつじ書房

[その他]

ホームページ情報

- ① <https://sites.google.com/site/naokitani1979/>
- ② <http://sucra-rd.saitama-u.ac.jp/search/profile.do?lng=ja&id=WpfVHeyC>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大谷 直輝 (OTANI NAOKI)

埼玉大学・英語教育開発センター・助教

研究者番号: 50549996

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: